

明治二十七年十二月 日

鶯宿會新誌

第一號

鶯宿會

新聲

武藏野や月の出入も草の果	渡邊庵綱雄
波の花咲や開くや月の海	清雪園梅水
吹習ふ笛の空音や夏の月	交風舎竹洗
名月や神酒の浪打膳乃上	花蝶
水汲て居る間に入ぬ二日月	山口亭山月
名月や船の込み合ふ都沖	改進居初竹
名月や最う真白き不二の山	高橋亭向月
見返して寒う成けり後の月	四節庵只樂
思ひある夜も更安し春の月	春花堂芳玉
聲かけて通る人あり月の門	花守園可一
古処らぬは水あり池の月	蟻堂竹溪
野戻りの人落合ふや三日の月	護國庵米輝

系統の咄しあるや盆の月	源泉堂水哉
桶の月纏せは空へ戻りけり	小山亭青二
手入せぬ松も見繁の月夜哉	竹見軒和山
障らねは雲は奇麗や今日の月	帶曉庵山秋
遊ひよき夜とは成たり春の月	喜鶴
飛入の咄え上手や月見船	高橋庵喬月
名月や波間しに寫る不二	松雪園竹英
見返れば見返る人やた平る月	新井亭可也
雨纏に雲は流れて夏の月	喜樂の家逸雄
芒もも芦もも寄らす冬此月	松吟舎月歩
寒月や入江に光る風の脚	縁園香畝
賑やかに街は暮る春の月	松軒風外
加茂川を見ぬ香ひあり夏乃月	松軒風外
馬洗ひ兼つゝらひ夏乃月	情舟
天照す神さへ月の鏡あ	孝光舎古賀年
人聲は船敷堤敷今日の月	梅花
待夜程見る夜ありたし今日の月	一丸
寒月や梢に氷る雪の花	溪舟
文字鏤初月や八幡は森は鳩と土鳩	満月庵驛長



同一月詠めて月の

留守居るを

青二

破を壁や見て

寐ぬ月に覗ける、

逸雄

柳から生れた

やうそ春の月

耕一

退けは又添えても

見た一月の雲

青柳

寒月や音あき

風の身よまみる

山月

雪と雪今霄

師走の名月か

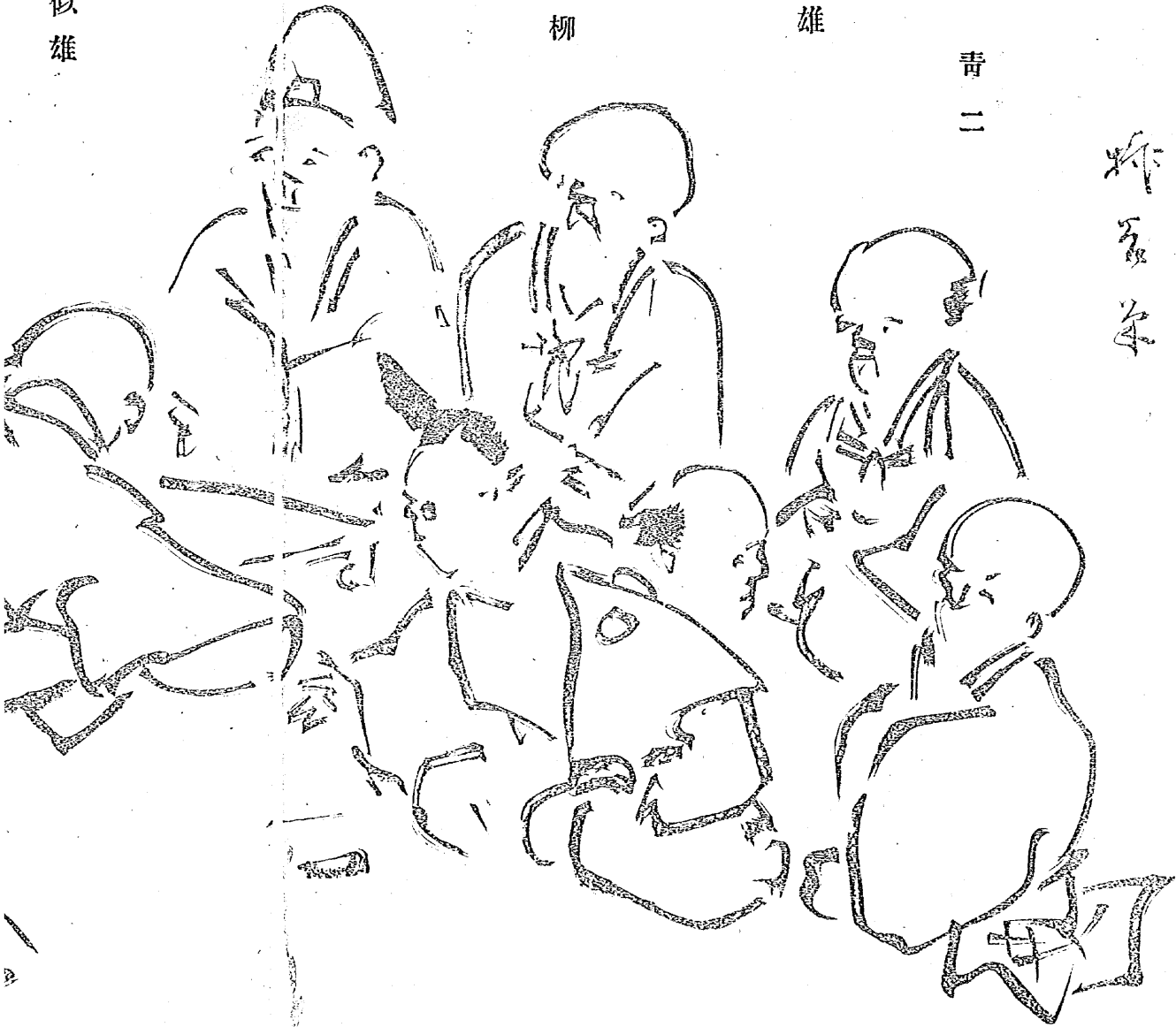
翁

柳に梅に

添はす冬の月

真似雄

新五郎



新年

同一月詠めて月の

留守居るを 青二

破き壁や見て

寐ぬ月に覗ける、

逸雄

柳から生れた

やうそ春の月

耕一

退けは又添えても

見た一月の雲 青柳

寒月や音あき

風の身よまみる

山月

雪と雪今霄

師走の名月か

翁

柳に梅に

添はす冬の月

真似雄

暮るぎへ嬉しき

空は夏の月

芳玉

世の無事の

障聞と

今日の月

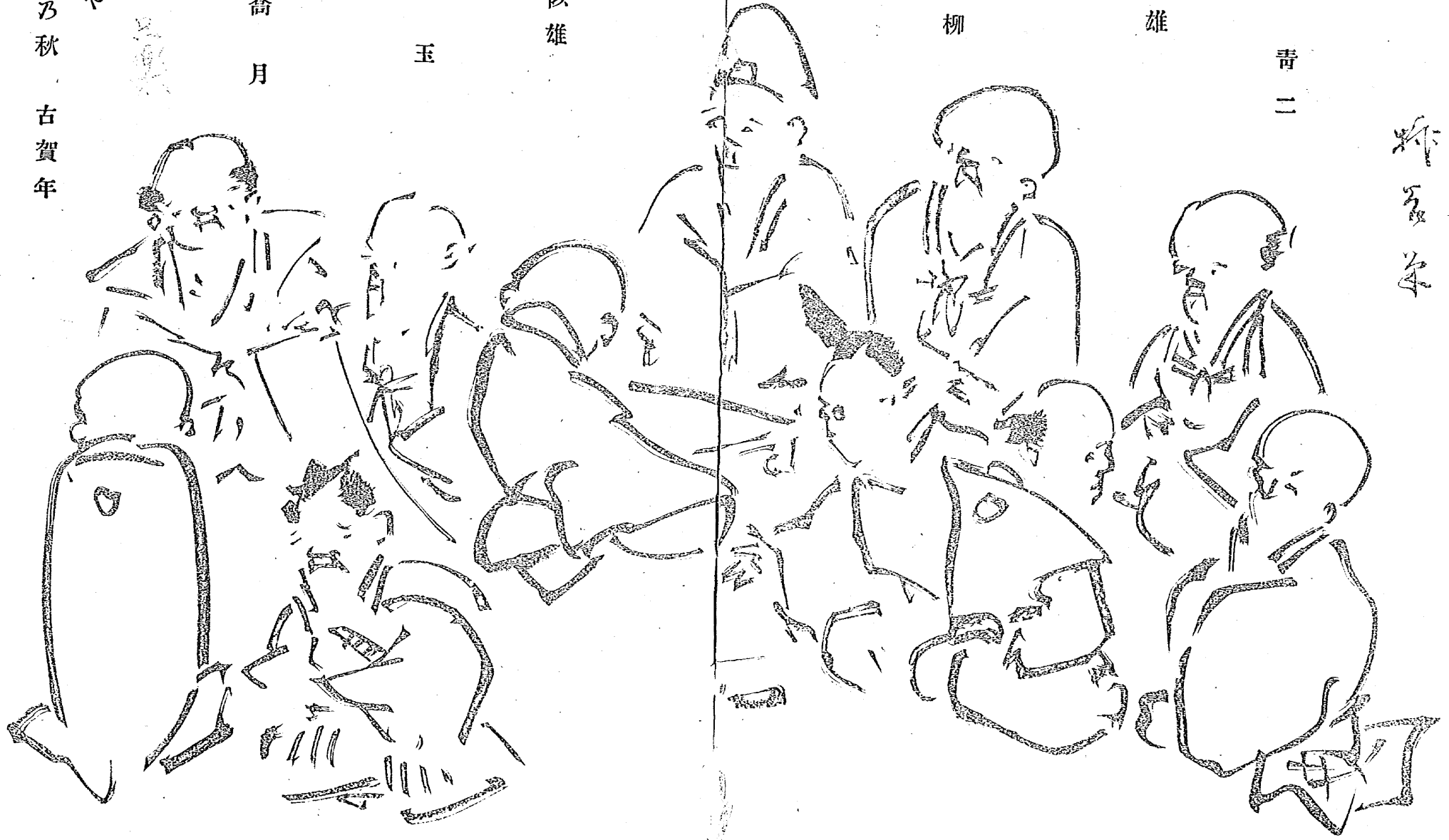
喬月

玉磨く工風は

あれと月に雲

廣嶋を假の都や

月乃秋 古賀年



鶯宿新誌第壹號

祝詞

鶯宿新誌の發行を祝は

好山逸史

抑武藏入間の里の地勢風土の然らむる所以古より風月友と居あら千里此外に遊びの妙あらず中にも權田直助井上淑蔭乃兩叟の神代素盞鳴尊の詠せし八雲起つの歌より始まり三十一文字此道を究め又碩布有柳の兩大人は芭蕉翁を祖と仰く十餘り七文字の道に明ふて廣く世の雅情を勵まし且は初學の輩を導きしも今は皆世を背おせられたれど其の風教に至りては日に榮之月に盛むお趣々んとは今茲明治甲午と云ふ歳の月まら秋はなかばとり吟友市原君地方の雅士と語らひ鶯宿會なるものを起し雜誌を發行して四方の人々と交り而して先人の遺轍を踏まんやせらる誠に嘉すべきの設けにぞありけるをれども事を起は易く之を全うするは難く古人も言へる如く何事お限らず終始一貫は容易あらぬのあれば責を負ふ者克く百折撓ゆまず千曲屈せざるの強き心もて事に當り創始の美志をして水泡お屬せしむるの遺憾なく美花を永遠お開かしめ母子の名號は如く世の黃鸝をして此の園中に宿からし免ば山根此里の名は高く千里の外に轟き渡るは疑ひあらず聊か初号乃祝として一言をること如斯爾り

鶯宿新誌の發行を祝す

會員 坂口水哉

今や諸事開明は潮流に伴ひ俳道の進歩は元祿の隆盛を凌ぎ天下到る所斯の道のため競ふて新誌の發行あり誠に盛舉と云ふべし抑も天の高さを仰伏して地の低さを察し日月星辰の皎潔なる山川の起伏氣象の變化風土の變遷より國家の興亡人事の盛衰に至るまで一々其れ状態の探味を採知し昇ふて高位の人に交はし又家よありて萬邦の名所舊蹟を知り心よ快樂を求むるは吟咏の力其の主位を占むと此に於て余の胸中常に吟咏の念往來す或る日友人某を其の書齋に訪ひ對話數刻某の曰く凡そ人の樂と四季皆絶えず春は則ち翫花の遊びあり夏は則ち納涼の樂とあり秋に

は則ち賞月の歡あり冬ハ則ち觀雪の催あり以て吾人の心ヲ慰め愉快を生ぜしむ然れども君の快樂と爲す所如何と語未だ終らざるに偶市原金太郎君の駕を枉ぐるありて圖るに鶯宿會ヲ創立一並に新誌發行の事を以て是に於て喜悅滿面拍一拍して曰く有之哉——余の君に答ふるもと將に此ヲ舉げてせんを忽ち某の賛成を得遂に山根の俳友一致團結して今日此の新誌を發行せるの幸運に至れり是をとり滿天下俳士の賛助を得名吟卓說續々紙上に光彩を放ち龍躍り虎嘯との狀を呈せば互ハ知識を研磨一快樂を増進せんも期して待つべし希む此の舉げて一時に止まら—先ず益々勉めて美果を結ば—先んよとを聊々蕪言を述べて以て本誌乃發行ヲ祝す

鶯の來て宿るるや此の園生

鶯宿新誌發行祝辭

山根 貧舍寒生

余が居近市原金太郎君なる人あり好んで俳諧を善くと頃日俳友全志と謀り鶯宿新誌てふ者を發行せらるゝの舉ありや而して該誌ハは教庭學庭遊庭知庭鏡庭文庭の欄を分ち各欄持論ヲ寄書に投書ヲ登載して順次其蓋奥ハ至らんとす其結構の宜しきを得實に余輩全抱進ヲ發覺誘導する先導者なり蓋し誠に一冊子と雖も能く遠近霧中に彷徨徘徊する者をして正路に倚らしむると實に渡津の舟筏ハ於ける航海の磁針に於ける呼吸の肺臟ハ於けるや一般なり故に歲月を歴るに従ひ需用者多く號を重ぬるに及び人心を感ぜしむると疑ひな—諺曰く藍をとり出て益々藍ありとは夫れ之ヲ云ふか君幸に之れが屈撓勿ら—先ハ家に懶惰の徒なく國ハ浮薄の輩なく天下を裨益する大ありと云ふべし茲に於てか余輩の抃躍惜能はず豈ハ余輩のみならん一國の抃躍雀躍なり依て蕪言を陳して鶯宿新誌の萬歳を祈る

鶯宿會之設立を祝す

文海 散史

熟々惟ふ今を去る三十年前霹靂ふる浦賀の砲聲一發吾人長平無事の迷夢ヲ覺破して以來我が國の文華駸々として其度を高め堂々として隆盛の域ハ達—既ハ東洋の英國ヲ迄稱せらるゝに至る實ハ我が輩青年の録々として貴重なる光陰ヲ經過して可ならんや宜しき汝々汲々として學を勵む武を講ずるの秋なり茲に余の雅友市原金太郎なる人ありて鶯宿會あるものヲ設立—滿天下の雅客を募り香秀芳逸華麗卓絶なる文章歌俳を記載—以て毎月鶯宿新誌ヲ稱する機關雜誌を發行去以て我が邦ハ文明富強を贊助せらる豈吾輩の祝せざるべからざる以所なり然りと雖も我邦雜誌

の發行せる日に幾千あるを知らず而して朝に發行去夕ハ廢刊せざるもの妙とせせず夫れ世の事業は成り難くして破れ易きは時勢の止むを得ざる所なり此乃一大目的ヲ立てられ—以上は百折多ゆまず千挫屈せざるの氣象を以て千難前に横たひ萬苦後ハ迫るとも必ず忍耐の二字を遵守去編輯者怠るなく出詠者倦むるとな々長久不盡に傳はらんとを遙に祈る聊々蕪詞を陳去て本會の設立ヲ祝す

文 林

勸業場に入るの記

會員 坂口梅軒

國産の盛衰は邦家乃貧富に關ス國民の勤怠は邦家の隆替を判つ蓋人生一日も欠く可からざるは衣食住に於て其最も人工を要する者は衣服なり今去る八年前我が山根村ハ住せ去八木原彌八郎なるも乃方今第一の急務は織物製造にありと稱え衆に率先去て之が端緒を開き以て摸範を垂れんと去泉工場なるものを創立—工女自有余人且手巾製造の業を創す爾後今日に至り益々盛大に其業を擴張せり本縣知事大にこれを賞せりと云ふ余入場して其業ヲ見るに家屋壯麗機械完全工女精熟専心其業を勵みて機械の運轉轟々耳を聳け而して製造品ハ悉之ヲ外國に輸出す余謂らば此の業にして益改良手段方法ヲ發明去て富殖の實ヲ擧げなハ餘響は延て他縣に及むん他縣風を聞て起らば又延て他の諸縣及はん遂に延て全國ハ及ほそ至らハ邦家乃富強期して待つべし

修身 家庭の花

投稿者曰く本編ハ遠藤由作君の著編教育兒談中ハ在るものなきを即ち此に轉載して諸君に博せんとす諸君幸に一讀の勞を賜へ

問ふハ一時の耻

學問は自身一人で出來ぬとが御座りまして譯合の別らぬ事柄や不審の解けぬ廉々を問ひ質すとが第一學問の上達する道であります去れと學問を致さすは或る人は物知りぶして人に物問する事が嫌ひ又は人に物を問ふは耻だ

と思ひて問ふぬも此れありまはるが是れ誠に益あきとてありまて理合の別らぬ事を問ふを嫌ひ不審れ晴ぬ廉を質すを耻と致まはる人は決て學問の上達する道有ませぬ凡て人は其面の異なるが如く甲の善とするものと乙は悪とと思ひ乙の知らぬものとを甲は能く辨へて居るものとあります左れば知るや知らぬとは強ち其人の學問の優劣ばかりには由らぬものてあります故に自身に優りたる者と劣りある者との區別を己の解らぬものと又知るも不安だと思ふふとは問ふて益あり損あきとて御座りはすまは好まや甲の人々知りませんでも亦乙の人が知て居るの必知れぬせんから幾人必問うちには屹度之れを知て居る者がありて教へて呉ますれば遂には吾が身利益を得て學問か追々上達して成人の後には良尻人と成られます個様に問ひバ一時此耻で終りますすが知らぬは末代の耻てありはして實ふその差あるとは丁度知ると知らぬと乃違のあるやうて御座りま

投稿者又曰ふ本欄には毎号投すべし讀者諸君幸ふ瀏眼の勞を賜ひ

演説

勉強は幸福を生む母

龍陽子

諸君よ諸君私は諸君も御存ふの通り淺學無識の者てムリ舛の坂口水哉君の御紹介よと出詠の末班に列れるを得不得不肖新作の光榮何者か之れに如くものは何とせん然り而て今日不肖新作は此の貴重なる誌上を汚さんとする一人てムリ舛す下手の長口上は諸君の御倦厭を來し既に「あくび」だらちの御方必有り舛のら不肖之れよと本題に取りう、らんとす

擬諸君私々勉強は幸福を生むの母と云ふ演題掲げまえた其意を能く通ずるや否やは知れませんか暫時諸君の御耳を煩ぎんや思ひ舛す人の此の世にゆるや誰の安寧幸福を希望まなへものは有り舛はい然らば乃ち其の之れを得るの道よ就うなければあり舛はい苟必其の道よ就かず安寧幸福を得んと欲はるは尙木ふよりて魚を求むるの如く誰か其愚を笑はあいものは有りません抑も安寧幸福を得るの道は如何曰々勉強の一語あるのと古歌ふ必「惰らず往の

バ千里の外も見ん牛の歩みのよと進々とも」と味ある哉言や誠に天の人材能を與ふるや必ず勉強多く勞苦大ある人を擇びます故人幼稚の時うら夙夜勉強一分陰を空しく經過するものとなく千辛万苦甘んずるの者遂に高尚なる學術を卒業ま管生生涯を安寧幸福に送るばかりではなく噴々たる芳名を竹帛垂き爛熳する美績を天下傳ふへき之を即ち幼稚の時より勉強ある功果てあります若し之を反て怠惰な事とて放逸耽りふ光陰を費す時は如何安寧幸福を望む必豈に得る理がありま舛やありハ致まはせん遂には衆人排斥せられ滿天下を去て身体置く所なく路頭に餓死するの外ではありません嗚呼原因なれば結果があへ勉強せずして安寧幸福を得るの道理はありませんそうて有りますから諸君日夜勉強て他日國家の良民とならんふとを偏に希望致し舛聊の鼻言を陳して貴重なる誌上を汚しませ

從軍

梅軒 坂口芳助

天子遠征塞北風

旌旗十萬曉烽中

東洋兵士心金鐵

常見將軍氣吐虹

天々下てき社をけれ日の本の大御光そお、一かまける

竹澤尙寛

梅花風靜

日の本の日を揺ふして咲梅はふく春風もきはらきりたり

全

◎本評満月集第一號

拔萃上座

會員春詠舍 大家撰

天名月や心の晴の捨處
地月ふこそ都鄙もなかりあり
人さまたれた空や見えも夏乃月
有明や眼も醒る井の水の月
退け婆又添えても見ぬ一月の雲
舞子とは能名の濱や夏の月
餘念あく月に物言一人かな
人聲のせぬ門を夏一の月
贈する人の影さす月見か
客殖て敷足を月むむろ哉

追、加

幾千代はらす月と筆の道

會員千歳園 大家撰

天名月やころの闇の捨どころ
地淋しみの秋を放れて今日の月
人照續々日補ふや夏の月
柳に迄梅にも添す冬の月

山根 花蝶
高萩 情舟
山根 一丸
全 驛長
豊后 青柳
山根 綱雄
毛呂 只樂
戸宮 山秋
山根 柳乃家
小沼 梅松
山根 古賀年
東京 眞似雄
判者 素悠

◎余興百花集第一號

拔萃上座

西京無爲吟社長撰

天寄る年迄今日は忘きて菊の酒
地年寄の重ねる菊此小袖哉
人何事も忘る、花の七日かな
散ぎく良人もさうして仕舞けり
見る人の心も暮す花の中
いからう蝶を来て居つ菊の花
あからへて招かれにけり菊の宴
初花や人も心はまたつみ
咲進む花や御幸も近き沙汰
稻比花世を賑はして治りぬ
北窓を明て梅見る日和かな
美しき世のは保る茶子乃花
世を捨て櫻の主と成りあり
松に鶴菊も胡蝶の日和かな
箋龜の箋干て居つ菊日和
約東乃外も殖る花の友
人の来て寒みへらぬ初櫻

山根 古賀年
全 全
山根 水哉
毛呂 青二
山根 竹英
全 古賀年
全 全
高麗 可也
静岡 風外
毛呂 辰月
東京 眞似雄
山根 綱雄
遠江 時彦
山根 古賀年
全 全
毛呂 只樂
高麗 和山

舞子とは能名の濱や夏の月
余念なく月に物言比どりかな
憂き秋のやいな物そ月ひとつ
同一月詠めて月の留守居かな
替る世よはらぬ今日の月見哉
眠う成斗り不足や春の月

追、加

社會の風流日々に榮へ月々に満る夢れ中に山
根俱樂部の満月集千部万部を織出は錦の秋の
時をきやとや飛乃友輝輝一亭
盡ぬ世も盡ぬ詠めや今日の月
月の雲さながら邪もせさり鬼

會員松葉軒 大家撰

天玉磨く工夫おれや月小雲
地雨霽す空へ流れて夏の月
人忍ふ身に彌増月の光り哉
照を續く日を補ふや夏の月
波の花散や開をや月の海
風ぎへも露け一夏の月夜哉
世の無事の贈聞と一今日月
柳うら生れあやうそ春の月

山根 綱雄
毛呂 只樂
全 全
全 青二
山根 月歩
判者 鶴雄
全 全
毛呂 只樂
越生 逸雄
戸宮 山秋
山根 古賀年
全 梅水
高萩 溪舟
小沼 喬月
秩父 耕一

近江尚蕪會長撰

天咲枝に寒くは見えす復り花
地海ふ能月や下戸も上戸に
人菊の世話仕達て今日は小袖哉
身の杖にをらへて菊の添木哉
日の本の色なり香なり菊の花
譲る世はゆつりて菊の手入哉
勝て緒をよて居るの歎兜菊
朝貞に七癖ひとつ直をけり
開く連散連花の日数かな
山茶花や日向自慢乃別座數
寒菊着綿程に、る雪
今更ふ驚も先つら一杜若
北窓を明て梅見了主哉
菊の香や隠家ながら人出入
木隠に見遊るも花の梨哉

秩父 耕一
山根 水哉
全 古賀年
判者 稻處
山根 竹洗
高麗 和山
山根 古賀年
全 全
遠江 時彦
山根 古賀年
毛呂 青二
山根 梅水
東京 眞似雄
全 全
全 全
秩父 耕一

十六夜も晴にちあらを隅田川
歌にして土産おしり須摩の月

山根 戸宮 山 秋

追加
名月や影ある物は松斗り
松植て置あき今日の月夜哉

判者 溪 曉

會員 葉月庵 大家撰

天琴の音は誰の隠れ家そ春の月
地破れ壁や見て寐た月に覗かる、
人遊ひとき夜とひなりけり春の月

毛呂 芳 玉
越生 逸 雄
小沼 喜 鶴

漁の戻りや須摩の月おして
たがはねて月の露る、手桶哉

山根 竹 英

丸居して最合視や月の庵
錦着てふところ寒一冬乃月

秩父 耕 一

追加
名月や寐よとは撞かぬ須摩の鐘
系統の咄し出るや盆の月

全 水 哉
全 梅 水 雄

丸こと錦着て居つ山の月
判者 竹 書

會員 大船堂 大家撰

天歌にて土産にしたり須摩の月
地工みなき座付の人や月の前

大樹 蓬晴月死亡ニ付
戸宮 山 秋
山根 米 輝

むら消の雪は汚きて梅白
花を出て見たきは只の月夜哉

全 全
高麗 和 山

山の道花見る人の廣げけり
初花に些少出過たる薄着哉

山根 竹 英

送る香に勞れゆるむや花の坂
約束の外は殖ちり花の友

全 全
備中 素 心

菊の世話仕揚て今日は小袖哉
なうらへて拓れにけり菊の宴

毛呂 只 樂
山根 古 賀 年

分て又免て度は今日菊の菊
七癖の中の上戸や菊作り

全 全 全

風吹栗津の里や星見卿
折迷ふ程おは咲す復り花

全 全 全
判者 朗 雀

静岡 光風 社長撰

天むら消の雪の汚きて梅白
地咲進む花や御幸近き沙汰

秩父 耕 一
静岡 風 外

人月をるみ捨ておき野路の梅
言の葉は添えて呉れけり菊の花

東京 眞 似 雄
山根 古 賀 年

朝の雨ゆる、花うら句ひけり
約束の外に殖け花の友

毛呂 只 樂
全 全

送る香に勞れゆるむや花の坂

備中 毅 庵

人柳にも梅おも添す冬の月
輕くして邪摩を瓢や春乃月

東京 眞 似 雄
川角 竹 溪

舞子とは能名の濱や夏の月
雨漏りやめり月洩る庵り哉

山根 綱 雄
全 竹 洗

名月や氷りさうある諏訪の湖
笑ひ出しきうある山や春の月

全 全 全
全 初 竹 長

屋根も帆も皆疊みけり月見船
見處を坂本にあり山の月

全 全 全
全 驛 長

追加

端居して歌種拾ふ月見哉
會員 臨下園 大家撰

判者 素 心
梅柳園 翠 山 代

天舞子とは能名の濱や夏の月
地月涼し京橋日本橋

山 不 綱 雄
全 全

人眞丸お出てぎへうと春の月
柳うら生れぬやうそ春の月

全 全 全
秩父 耕 一 洗

賑やうよ街の暮て春の月
夏の月雨待み、ろ忘をけり

小沼 梅 松
毛呂 香 敵

日の敷を重ねて丸き月夜哉
客殖て敷足を月のむろ哉

山根 竹 英
小沼 喬 月

歌にて土産にしたり須摩の月
須摩の月秋の氣色を纏めけり

戸宮 山 秋
全 全

天山の路花見る人乃廣きあり
地むら消れ雪は汚きて梅白

山根 竹 英

人咲枝に寒みは見せは歸り花
花守や雨の朝戸を叩かる、

秩父 耕 一
山根 竹 洗
静岡 風 外

菊の香の纏れて居るや机先
追加 西京漫遊旅舎中

判者 馨 佳

備中 蕪 流 會長撰

山根 竹 英

山の道花見る人乃廣きあり
地むら消れ雪は汚きて梅白

山根 竹 英

人咲枝に寒みは見せは歸り花
花守や雨の朝戸を叩かる、

秩父 耕 一
山根 竹 洗
静岡 風 外

追加

月よ向ふよ、ろに雲をなほり見
入間川松廻家 大家撰

判者 竹 洲

天夜や深一月の霜ねく關ヶ原
地鐘撞も酒を酔せて月見は夜
人廣嶋は假の都や月の秋

山根 驛 長
全 梅 水
全 古賀年

五月雨空とは見えは夏の月
月の宿寐さす枕はあつてけり
寒月や磨きあけぬる砥石山

全 一 丸
静岡 風 外
山根 月 步

破れ壁や見て寐た月に覗かる、
名月や海を眞向乃一ト重町
月のむらう疊先は鐘の聞えけり

全 全
戸宮 山 秋
小沼 喜 鶴

汝も朝寐の指折や春の月
冬の月戸の明は所無用哉
飯能妙齊 大家撰

判者 貢 山
全

天塞翁の馬を笑ふて月を友
地破れ家や見て寐た月に覗かる、

山根 古賀年
越生 逸 雄

八月は雲牡丹の蝶と眺め見
名月や舟うら舟へう一硯

高萩 溪 舟
小沼 喬 月

(十)

追加

撰むへき物は友也梅と月
菊乃世話仕揚て今日は小袖哉

高麗 和 山
山根 古賀年

菊の香や隠家ながら人出入
梅よよい月や下戸に上戸にも
開をまて散まて花の贈るあ

高麗 和 山
山根 梅 水
静岡 風 外

花の香やこらへ雨の夜は降る
何事も忘る、花の七日うあ
譲る世のゆつりて菊の手入哉

山根 水 哉
遠江 時 彦
山 不 竹 洗

花の旅月戴て戻りあり
瓢から歌の種出と花見哉
美しき物は保たす芥子の花

毛呂 青 二
山根 綱 雄
東京 眞似雄

月くるみ捨てありけり冬は梅
木隠れ見ゆる花は葉り哉
散てから世は静也稻の花

秩父 耕 一
静岡 風 外
山根 竹 英

分て又目出度ものよ今日の菊
追加 日清交戦我軍の大勝利を祝して
菊の香や廣き籬外まで迄

全 古賀年
判者 星 畝
山根 綱 雄
高麗 可 也

備中蕪流社社長撰

天山茶花や日和自慢を別座敷
地初花や人の心とまふつと

山根 綱 雄
高麗 可 也

寒月や耳も縮まる歎と思ふ
漣の疊むや袖う浦の月
元山のおとつきり高冬月の
交り廣ける月乃むらう哉
明月や裏表なき鏡山
寒月や入江に白き風脚

山根 向 月
秩父 耕 一
高萩 梅 花
小沼 喬 月
山根 月 步
毛呂 香 畝

追加

みんな寝て仕舞ぬこんかい、月に
秩父冠月庵 大家撰

判者 其 笙

天廣嶋を假の都や月の秋
地名月や氷りうなる諏訪の湖
人能月といふより外は無夜のあ

山根 古賀年
全 驛 長
全 竹 洗

寒月や梢も氷る雪の華
雨舎り一ぬきは暮て夏の月
細う成瀑布のすると冬月の

毛呂 一 丸
山根 香 畝
戸宮 山 秋

須摩の月秋の景色を纏めけり
物影ハ虫の夜に去て今日此月
日お向ふ舟を月見の戻り哉
久れてさへ嬉しき空は夏の月

山根 水 哉
毛呂 芳 玉
判者 耕 一

追加

須摩の月氣色に酔て更けり

人日の本の色なき香なり菊乃花

山根 驛 長
毛呂 只 樂

約束の外に殖けり花の友
開く連散連花乃囀り那
洩る香の外國ふまて今日の菊
花守や雨の朝戸を叩るる、

全 初 竹
静岡 風 外
毛呂 青 二

瓢ら歌の種出す花見哉
幽林に其香は高蘭花
山茶花や夕日隠る、藏の窓

山根 柳の家 英
全 柳の家

瀧やなる水潔白や葛の花
菊咲て祝はれけり若白髪
美まき物は保あす芥子花

全 古賀年
全 綱 雄

勝菊の花や色香も只あらず
朝貞に七癖ひとつ直りけり
咲枝も寒と見え歸り花

毛呂 青 二
山根 竹 洗

つれらう蝶と暮けり花の道
長らへて招られにけり菊作り
吉野路や月雪分て花明り
七癖の中の上戸や菊作り

全 古賀年
全 素 心
判者 芳 舟

遠江連山社長撰

足らぬ日お余る匂ひや菊の花

(十一)

松山燕千居大家撰

天踏て見て越ゆる土橋や臙月
地月の庭疊めは鐘の聞えけり
人琴の音は誰か隠れ家そ春の月
田鶴の養る芦田の水や後の月
舞子と尤能名の濱や夏の月
塞翁々馬とや云らん月の人
月よふそ町も田舎も無りたり
淋しきの秋を忘れて今日の月
河瀬よと姿乱さす春の月
望月や駒に支度着せて乗る
満月のまろさ元あり鶯宿會
追加 貴會の隆盛を祝して
判者 一佳

天寒月や音なき風の骨ふいひ
地加茂川を見ぬ宵はな夏乃月
人鶴の舞ふ日和は暮る臙月
隣に笑はる、まて月見哉
名月や這兒の撫る松の影
見あからに來るやら遅し月の客
名月や夜更て戻る池の鳥

高麗 和山
戸宮 山秋
毛呂 芳玉
山根 驛長
全 綱雄
山根 古賀年
高萩 情舟
小沼 梅松
山根 初竹
全 驛長
判者 一佳

山根 柳の家
毛呂 只樂
高麗 溪逸
判者 眞似雄

山根 梅水
越生 逸雄
毛呂 芳玉
小沼 喬月
山根 初竹
越生 逸雄
山根 驛長
高萩 梅花
山根 綱雄
備中 毅庵
判者 時彦

山根 古賀年
高萩 溪舟
判者 時彦

山根 山月
静岡 風外
小沼 喬月
高萩 梅舟
全 梅花
静岡 風外
小沼 喬月

東京幽玄齋大家撰

天美しきものは保ふす芥子の花
地讓る世はゆつりて菊の手入ら
人菊の香や隠れ家ながら人出入
山茶花や日向自慢の別座敷
杖曳て居ながら菊に添木哉
菊の世話もあきて今日の小袖哉
先五穀成就れ上や菊の宴
勝菊や昨日や替る置所
咲進む花や御幸も近沙汰
譽たれと其菊切て呉ふあり
鳥も人馴て鳴けり花乃枝
約束の外に殖けり花の友
近道を花賀教へて覺へけり
追加

立句交りを廣まる月のむろ哉
脇句御投吟あれ
但し壹名二句限り

附勝俳諧

判者 雪窓

山根 綱雄
遠江 時彦
東京 眞似雄
山根 綱雄
全 古賀年
全 全
全 全
毛呂 青二
静岡 風外
豊后 青柳
備中 毅庵
毛呂 只樂
判者 雪窓

遠江巽家大家撰

四角あら往て蹴らん須摩の月
天波の花散や開くや月の海
地破れ壁や見て寐れ月よ覗かる、
人戸ままりの油断を譽めて夏の月
寐た家を笑ふて通る月見哉
名月や歌の流る、隅田川
雨籬に雲は流れて夏乃月
武佐と踏草の露けし月の秋
名月や椽に踏る筆の鞍
夕月や浪に花咲千松島
寐た後と橋音けし夏の月
追加

山根 梅水
越生 逸雄
毛呂 芳玉
小沼 喬月
山根 初竹
越生 逸雄
山根 驛長
高萩 梅花
山根 綱雄
備中 毅庵
判者 眞似雄

山根 古賀年
高萩 溪舟
判者 時彦

山根 山月
静岡 風外
小沼 喬月
高萩 梅舟
全 梅花
静岡 風外
小沼 喬月

遠江連山居大家撰

月涼と松と隣りの物あから
天廣島を假れ都や月の秋
地待夜程見る夜有る今日月

山根 古賀年
高萩 溪舟
判者 時彦

文音

鶯宿新誌投稿を勧むる文
山根尋常小學校 市原とく
一筆示し、陳バ拙父鶯宿新誌を發行の目的有之に付
御前様並に御友達御誘ひ何の珍らしき事を澤山御投書被
下度申上候早々

忠告

東京 永田眞似雄
拜啓益々御清雅被爲涉奉南山候陳バ過日は玉卷御廻送被
下難有早速拜見仕候御集句迄至て多數殊に秀吟充滿殊の
外面白覺候乍去吾輩開旨ふて撰抜困難定免て御抱腹之儀
と恥入候玉卷相穢候段は眞平御海容可被下候扱銘々評と
心得候に付地卷へ引墨致候へ共萬一相違致候は、御高
免相願候景品は遠隔の義に付輕量之品相撰み甚粗末なる

人名月や寺を湖水の照を返し
 破れ壁や見て寐た月に覗るる、
 今日の月神武以來の光りかな
 朝貞に笑はる、ほて月見哉
 初日の出なら鶴なら先月の尸
 海陸の清兵打て月見哉
 よし月といふと外乃なき夜哉
 暮歌の夜打に來たり冬の月

追加
 高萩 梅花
 越生 逸雄
 山根 古賀年
 高萩 溪舟
 山根 古賀年
 戸宮 山秋
 山根 竹洗
 全 綱雄

伊勢 一碧園 大家撰
 月照や林かきれの水にまで
 天行水に月は動る居りもり
 地投込たやうに見えきり池の月
 人名月や座敷好むも客の慾
 須摩の月秋の氣色をまどめけり
 出直まて月見來たり松作り
 明月や椽て見付し離れ汁
 踏てのり越す假橋や臘月
 破れ壁や見て寐る月に覗るる、
 月の宿寐さす枕はなかりけり
 玉ふ帛綿かけたやう也月の雲

判者 雪窓
 川角 竹溪
 山根 梅水
 全 向月
 戸宮 山秋
 全 全
 川角 竹溪
 高麗 和山
 越生 逸雄
 静岡 風外
 山根 一丸

ら郵券相添候間可然様御取扱奉願候且亦初々敷申述候も
 如何と存候得共玉巻は月一題にて既に五百吟も御座候不
 付可相成は二三題或は四季の風月花鳥とる或は月花やか
 被成候ては如何や此段乍憚一寸申上置候間御勘者可被成
 候且又後回分出草は澤山可差出間左様御承了可被下候何
 必要用のみ早々敬具

書翰
 伊勢 中井社樂

拜啓這回満月集地巻御遣相成承知仕候何を兩三日中お拙
 評の上差出ま可申候決て謝禮おは及び不申候小子唯風
 交を廣くするの目的お御座候間今後お不相變御風交可被
 下候
 私長男三才にて死亡仕り候に付ては追悼集相金度候間薄
 き短冊にて冬季の句一章御悼と御遣一被下度上梓の上配
 呈仕候實は先般より各地大家迄も相願最早今日迄に四百
 五十人に及び候蓬字曲川永機素水吟風南齡聽秋春海は勿
 論全國乃大家は大概申受候因て此段奉願上候
 申越
 豊前國企救郡足立村砂津有松晚翠大家は來年初老の齡を
 重ね玉ふ由にて四海に大家に賀章を乞帖を物して机上に
 備え置き永々御懇情を蒙る思想を聽かんとせらる、由に

追加

名月や雲出ては消出ては消
 備中毅庵 大家撰

天日に向ふ舟は月見の戻りかな
 地同し月詠めて月の留守居るあ
 人盃洗も湯に汲み替て後の月
 武藏野や月の出入も草の果
 夏の旅わざと夜わいて須摩の月
 退々ハ又添ても見ぬ一月は雲
 筆の手を膝く突けり月の雲
 屋根のある船は好まず月今宵
 月退て座乃崩れけり月の宴
 馬洗之兼つたらひも夏の月

判者 社樂
 山根 水哉
 毛呂 青二
 東京 眞似雄
 山根 綱雄
 毛呂 芳玉
 豊后 青柳
 山根 素心
 全 竹洗
 全 米輝
 高萩 情舟
 判者 毅庵
 戸宮 山秋
 毛呂 香畝
 全 青二
 全 只樂
 山根 花蝶

第三回月並句集

題四季乱 五句吟 入花一ノ二錢 余ハ一錢

山姥 舍 兩先生撰 各評與拔落卷 二評合點三光へ美景 外五客へ景

春詠 舍 右ハ來ル一月十五日切七印上本誌ニ披露シ速ニ返草仕

リ候間江湖ノ雅君陸續抄投吟アラソコヲ乞フ
 遠隔ノ地ハ返草費二錢御添ノコ不添ノモノハ幸便ア
 ル迄返草セズ無入花除卷
 埼玉縣人間郡山根村大谷木
 玉章大集所 小高 新作
 右出詠ハ満月集出草ト同封不苦候

暮の敵の襲ふて来り冬の月
 名月や空澄む程の波一つ々
 山風の雲追分て冬乃月
 待夜程見る夜ありぬ今日月
 鶴の舞空より暮て臘月

寂あまりて二度見る後の月夜哉
 判者 晚 翠

豊后三眠舎大家撰

天夏の月雨待ふろ忘れけり
 地物影は虫の夜にてけふの月
 人琴の音は誰の隠れ家を春の月
 雨響て居きは出おけり夏の月
 明月の間に合せけり橋普請
 寂靜る町の長さや冬の月
 遠く聞笛の音ゆか夏月の月
 見返れぬ見返る人や臘月
 柳にぬ梅おも添りす冬の月
 腰りける石の冷たき月見らあ

明月や何處を汲てもよき流
 判者 青 柳

補助遊月庵大家撰

武陽 智力養成考句會月並句輯
 山根 第二回披露
 二評 天四十七點竹 英 地四十五點全
 合點 人四十二點竹 吳
 番外 秋泉 竹 吳 初竹 秋泉 四十二點ヨリ
 三十五點ニ至

山姥舎金太評
 白瀧の 見えて奥ある紅葉哉
 戸さえて月洩る庵や虫の宿
 蚊柱を吹崩えけり秋の可是
 逸 北京城落ばや今日此縹の月
 指 初 竹 泉 英

光穎居邑邦評
 明る夜此外に明る花櫻々な
 野鼠の穴のら出ぬり三十三才
 若かへる蝶の羽ふりや小六月
 逸 最る罌粟の散て菊咲園哉
 指 秋 竹 泉 英 吳

朝良や一日毎に高ふ咲 企 壽 泉

天月の雲牡丹の蝶と詠めけり
 地交り廣なる月のむろ哉
 人歌にて土産よえたり須摩の月
 廣嶋を假の都や月の秋
 名月や松七句ひのふかみどり
 初日の出なら鶴あらめ月の厂
 丸い座も一は一行義そ月の宴
 名月や見渡す處は皆田面
 掛らねは有沙又と一月の雲
 名月の初いぬい残る光り哉

眞ふろろ外念を一月の友
 判者 表 川



俳諧 山根俱樂部 評互發句合
 題 四季ノ月五句一組 上座丁摺呈上
 會員六家選 入花壹組無料
 各國大家數評 一ヨリ二錢ヅ、
 右各評與拔落卷 銘々三光景
 外惣評合点一等ヨリ十等マテ美景
 四季ノ花二句合
 余興題 入花 無 二方壹錢、
 各國會社長二評 秀逸卷収三光景
 締切 毎月十五日 開卷 同五日

補助各國大家 玉詠大集所 全 所
 責任 市原金太郎 會
 出詠者二里以上ノ地ハ返草費二錢ヲ乞
 但シ往復はがきニテ出詠不苦候

俳諧之連歌

散をーとみて只白一枯尾花
物音高き冬の夕晴
代り合ふ友を櫓に待兼て
舟のぬよりの工夫するあり
絹比直のーさまに上る月見前
はつきりまたる朝の薄冷
踊子此草臥儲け嬉しうり
舞樂りーてある本の讀ぎー
青こと簾れの匂ふ掛始め
客あーらいにそく盃
いつ迄迄倦ぬは余所乃戀咄ー
髪乃乱れも時のはりあい
峯の月宵の闇たき残るなり
忘れ鳴する籠の鈴虫
裏れ戸の折よ明ぬ秋寂よ
銅壺で鳥渡酒をぬくめる
一枝の花と手紙を請取て
蛤賣の隣にも居る

有柳 金太 翠山 水哉 晴月 壽泉 竹洲 竹洗 竹畫 竹英 竹心 素步 月雄 鶴輝 米曉 溪冰 梅悠 素丸
(以下次号)

満月集發行祝

月は夫草を出て草に入てふ武蔵野のゆかりも深き言乃葉
の山根の里の片邊り春ハ鶯宿借れる草の庵の軒高く昇き
る月の清らかにさあみて迄のす満月集雅ひの道に睦み合
ふ兄弟姉妹の遠近ハ共に尋ぬる芭蕉葉の置く白露の濁り
あき其正風の教草鬼神ハ靡々妙趣を探る便の機や昔の巖
の幾千年幾百年ハ限りなう輝き渡る月影の浦安國ハ扱置
て外國々の砲夷まで胸の雲霧打拂ひ心の垢を磨きてし正
まき教へを導きて入たる道に基ける煤灼とふそなれかま
ど喜ばまその余りのら回らぬ筆ハ鄙言を綴り合せて本集
の發刊を祝するこや爾り

大空ハ隈なき月此光りのあ

交風舎竹洗

新誌の發行を祝す

千代八千代かけて榮る月と花

龜鶴亭壽泉

鶯宿會祝創立

鶯乃谷移りーつ花盛り

源泉堂水哉

宿取て置て出て行く花見哉
會每ハ出合て嬉し花は友
祝ふ聲はるや廣かる花の下
創めららむ様子や花は宴
立ち並ふ木に引花の曇り哉

自賀

月の武藏にうまれ月の清光知らず花の山根に住みて花
の色香を知らず文明の御代に逢ふて文字を知らず俳諧を
好きて發句ヲ知らず世に君子あるを知りて之に交るふと
を知らざきは晨に生きて夕部に死すの外なきを斷腸去我
か身の拙劣も顧みず俳諧山根俱樂部なるものを創設一些
々ある廣告発さざるを布き一に幸ひ諸大家の賛成を得高
吟卓説を給はり月の興花の情をも探知するの端緒を開く
に至り喜悅の餘り徒然の慰勉にもと一小冊誌ヲ綴り世の
雅友に頒つこと、な一たは

明治も甲午といふ歳の末つ方ながら

左の一吟を添ひぬ

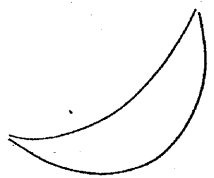
市原金太

月と花ひとつ机の詠免らな

發刊の趣旨

余輩淺學非才の身を以て俳諧山根俱樂部ヲ設立するや七
月十三日當地未曾有の暴風雨ふて山林の裂開田園の砂礫
家屋の破却等山根全村の損害尠ならず加之首唱者中梅

柳園翠山大人ハ後備兵役の軍籍に在るを以て日清韓事件
のため召集せらる又大樹蓬晴月老人ハ不幸にも黄泉の客
となりて鬼籍ハ録せられ且ハ投書の少なきを以て冊誌發
行の期を誤り出詠者各位ハ對テ大謝するの外な一責任金
太ハ心志を勞するハ怠りなかり去も終ハ今日に及ひ諸君
子より書狀又ハ口頭を以て冊誌の贈上を促さる、に至り
さり因て延引ながら初号を發行一玉机の下に配呈す世の
雅君此の小會と小生の微志を憐れみ今後益々盛大ハ永續
するの策ハ於て缺くるとなハ様輔佐せられ以て玉詠卓説
を惜むことなく投入あらんことを伏て祈る頓首々々



寄贈之部

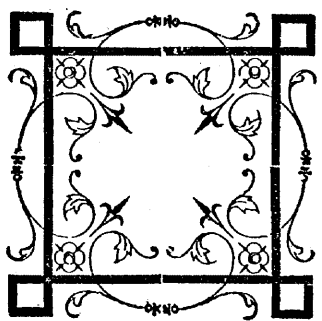
- 一金貳拾五錢 市川芳玉君
 - 一金貳拾錢 永田真似雄君
 - 一金拾錢 秋葉溪曉君
 - 一金拾錢 宇津木鶴雄君
 - 一金六錢 遊月庵君
 - 一染筆物數葉 久保耕一君
 - 一染筆短冊數葉 中井社樂君
 - 一全 有松晚翠君
 - 一全 太田雪窓君
- 右ハ本會之御寄贈被下難有奉謝候也

謹賀新年

明治廿八年一月一日

鶯宿會員

一同



本誌投書畧則

本誌ニハ何人ヲ不問投稿ス
 ルトヲ得ル
 用紙ハ半紙ニテ文体隨意
 一行廿四字誥行數無制限
 書体ハ階書
 各投書ニハ國郡町村番地姓
 名ヲ詳記スヘシ
 但シ此規則違反ノ物ハ沒
 書ス

編輯人

埼玉縣入間郡山根村
 大字大谷木五十四番地
 市原金太郎

發行人

全所廿一番地
 小高新作

印刷人

全所壹番地
 坂口芳助

發行所

鶯宿會

明治廿七年十二月

日印刷

明治廿七年十二月

日出版

鶯宿新誌附録満月集地巻

花あらは蕾みなりけり初月夜
草も木も皆明月の光り々あ
寐惜て一人になりぬ月見臺
一夜つ、別に名れあり秋の月
夕暮は人にふそあき秋の月
夜も稻の實のるよふあり今日の月
別々に夜水守る火や夏の月
松鳴や筆お盡せぬ月今霄
芋堀た畑お淋しや後の月
月の雨仇お重ねて須摩の宿
暮れぬ内風呂すまけり春の月
寐るおきへふさ心あり雨の月
誰の念のと、いて退そ月の雲
名月や星お心のほかぬ霄
老の客上座にすいて月見哉
寐ぬ家は野よも淋し月此秋
一ト景色ましなり月お、る雲
不足あき身の果報なり月見此座
貫ひ湯は御白粉くき春の月
荷積船月はうは荷となりおけり
き、いやきむしる屏風や冬乃月
釣替て月此後や螢籠

寐た町と野をりも淋去冬の月
有りて能雲をへ消て月の秋
寒月や生死て居そふな鬼瓦
畑へ出て三日月拜む山家哉
名月やきわく鳥のおをあらす
空に行く心のこまや月今霄
貸舟の出拂ふて々夏月の月
海士か子お鯛をつるとや春此月
閨へきす影憚るるや夏乃月
鬼瓦光りて凄し冬乃月
冬の月照るや野山は赤はぬか
大竹のすれあふ音や冬乃月
更て行を影を見せつ、雨の月
春の月そ、ろ歩行や須摩の浦
隅田川船の便りや夏乃月
うはすてや人も山あす今日の月
明月やありたけ見ゆる千松島
石山や籠りなからに冬の月
集會の戻り程よ去春の月
閨の戸も明はななり夏此月
満月此千里に光る俱樂部な
初月や友呼間もなき在處

植込の影もさへけり冬の月
常に見る物かげ凄し冬の月
吹きおろす風は音絶て初月夜
名月のそゝき出しけり海乃面
手にむすふ水も尊し夏の月
折々は雲間隠れや秋の月
重さげな空よぼつりと春の月
雲晴きて筆取直す月見々な
海原もぎえき止とけり臘月
目小障る物どてはあま冬此月
鐘の音も空にみゆるやれほろ月
暮れ兼し空に出たり春の月
橋越しは運ふ料理や夏此月
譲り合ふ場もなき舟此月見哉
世を捨てた庵に客あり月今霄
名月や親み深き峯の松
寐惜との二人出合ふて月見哉
吹ゆらす度に研ぎ冬この月
澄んてこそ水も誠や秋此月
岩角の昔乃光るや冬の月
寒月や磯乃松葉の氷る色
月涼ま岩にくだける水の音

眼にあまゝる気色や月の昇る海
夕月の濡て木此間を昇りる
寒月の岩照り崩す光りる
寐て足らぬ夜更しきり夏の月
名月や文字うく膝お雲一朶
雨お二度逢ふて晴をきり夏此月
名月や庵お香の立つ歌観
出嫌ひはいつと留守居よ夏乃月
念此入るもてなし振りや月乃庵
戻り来て朝戸たゝや月の人
風の研く鋭此峰や冬の月
皆人の我も顔お月見々
船あかる人の嘘や後の月
傘さえて来るや風雅な月の宿
乗り出してららの趣向や月の船
蚊屋の月無病の腹お叩ききり
朝膳を田毎に向けて月の留主
まだ松に心ろ移らす春の月
千金の空から出さるあつこの月
炭の酔きます迄あり冬乃月
啼つれて下ろす鳥あり冬乃月
一と夜つゝ眼を更科の月見々な

退ひてら見きは少き月の雲
一と掉も後ろはき、ず月のふね
譽捨にして戸を引や冬の月
たまゝに見るは朝な入梅の月
松影を退いて居るや月の客
心なを月お掉さす渡り哉
原中や放れをたたり松の月
水の月折し風のさらし月
歌種や成る松影や今日の月
見る者に皆景色あり今日の月
照るでなく曇るでなく春此月
寒月や裸を吹く風の音
朗らうな謠の節や臘月
袖袂なき我影や寒の月
夕立の洗ひ出しぬる松乃月
今日の月更科見たし須摩見たし
早起きを去て有明此月見哉
輝に雲も散りきり今日の月
心まで高くあまけり山の月
何處まで照し渡るや昇る月
富士の名も流石お高し今日の月
月の出て心も廣し我の庵り

月の名も高きは松のみどり哉
昇る月々々もあたらし山に海
日割して杖曳く翁と須摩の月
里いもや密柑や月の備へもの
縣國に輝く度や月はすむ
臘月人皆しどろくろを
寒月や光りまどまる岩の鼻
月淋ま千草の秋の物なら
松風の上り居りぬ冬の月
寒月や嶺にはむつこの花曇
霞のら出さる様なり春の月
野遊の暮てかいるや春の月
満丸を月はみはれと臘かな
よく見れな影のおまけり臘月
水のたる様な光りや夏の月
暑そら光りふりなり夏乃月
初月の物思はせそうあ光り哉
澄渡る月や隈なく空と海
月丸く雲影もあき今霄々な
八洲の外も照らすや今日の月
更る夜を月一とつ家の詠かな
更る程寐るまをのなれ月夜哉

待霄や待間を月に待れけり
さい切て松よ聲あり冬の月
吹晴て星よ光るや冬の月
疑いは山も動きぬ朦朧月
照り返す力ぬけて春の月
夏も猶寒し研師の店の月
霜もほる様な空なり後の月
瀧口の瘦せてもると冬の月
眼にうつる物皆底ま春の月
夕陽うら露口ほいて梅雨の月
瞳けの離れて月の今霄々な
空色の松を離れる月夜かな
葉の凍る竹やのしま冬の月
名月や旭おぎいおまき松の影
貞あぜぬ柳は免たし夏の月
更る夜に物うげ若ま春の月
寒月や燈火暗き磯の家
まちなね一夜ははた若ま三日の月
雨ふそむ雲片空お夏のつき
月涼ま誰賀心の隈田川
幾千代古ひぬ色や今日の月
植木屋の出直して来る月見哉

する事はしてゆるくと月見哉
瓜ひきて明す夜はあま夏の月
木よ餅の断し上手や月の縁
花より下戸は團子の月見のな
降る雨の氣味よを晴て夏の月
月照るや水をばかと思ふ程
沖鳴りの空に澄きけり冬の月
波越の松あら出たり夏の月
橋守の客となる夜や夏の月
名月や流石に松は別あまの
静のぎや月よゆらる、竹生嶋
草や木の化粧鏡や春の月
堪忍も盡ま所まあり月に雲
風お磨ぬるきて寒し冬の月
舟には座敷定免て月見哉
灯火の消えて涼しや舟の月
石山や鐘お崩る、月の峯
光る葉は楠か椿歎冬の月
水音お静に暮れて春の月
須摩お寐て明石の島や月の霄
見る身まて濡る、思へや雨の月
歸らむや我も思ふや花お月

青空や星もかくる、月の冴
冴へ渡る程猶寒し冬の月
管舟の煙を絶ゆるや冬の月
芋までも被衣は脱ず後の月
名月や高い木もあか磯乃家
月一つ幾万人のなかめあ
寐よ人を笑ひ起はや月の門
名月や寐よとは誰の氣の付ず
名月や寐よしみて聞鶏の聲
地よ影を見せて走るや月の雲
名月や船へ遊びに船で行
投込だ様に移るや池の月
魚屋の夜毎に来るや夏の月
晴れよとて起す友あり月の門
寒月や磯の松風波白し
只できいあか月の夜はよ
寒月や名處に捨てある
須摩よれえら、ろの通ふ夏の月
寒月や物好きさらく濱傳ひ
石山お只れ山あり冬乃月
樂しきや夜は月晝は鶯宿會
寒月やさむそふに皆懐手

覗られて恥しそふや風呂の月
風呂にのこ心の通ふ冬の月
あ、晴る、雲ふそ月の景色哉
向ふから来るのも月見らさ人
思ふ圖に松もよよ月もよ
寒月や盆お豆腐の氷る音
四季ならず松は千年此月の影
月は天面の鏡も今日の海
梅に月海と友やある夜かな
船の月右と左りれあかめかな
よい風の吹て嬉しや夏の月
仙境の景色は爰か花に月
暮ぬ内光り持けり秋の月
まゑ稲此香もほる月の庭かあ
と、まらぬ物は水なり月の影
寒月や真白う見ゆる瀧の景
月涼し草木の戦を音
吉丸凶に返て今日も雨の月
見るにやもよよ鏡の浦の月
待宵や月お届く筆の掉
板橋を月も歩行や下駄の音
四海皆兄と弟や月乃友

文字
鑠

乾々うと思ふ照る月夜かな
其處となく明るき空や雨此月
月のきとこそ冥加なき草の原
醉醒て見れば冷たき秋の月
名月や明石は社須摩は寺
忍ふ月影と細目と見るとり
有明やよ、ろつと一乃月乃霜
句ひもり今出る月乃さ光り
不二朝熊ゆへにふた見り浦の月
月乃座よ出すや筆立硯箱
河も月見るやら掛つ眼鏡橋
山もきへ負す鏡の浦の月
月に尙光るの増や信濃川
月澄てゆれつまるや海の浪
月影に草樹にとちて夜や更ぬ
田に月の影と更科郡のあ
まんに丸に月の生を雲間哉
月切きのまて面白く月此空
月を切る双の光りけり月の鏝
屋根落て壁もる月や不和乃秋
結構に錦飾る歎あつらけ
つら男よあつらあるや白兔

なつあや雲に入間の里乃月
跡先なき光りあり今日の月
晴て又新客來たる月見りあ
立枯の松と置や月の霜
名月やひと風情増庭乃松
井に物の落る音あり月の空
武藏野や左右に田乃山乃月
月ひとつ田毎に見ゆる信濃哉
日と共に天地補佐するや月
松每あつりて床の月のか計
松杉は懐をら雨の月
月々を榊りや水のすみぬ川
二度見れば二度の景色や月の雲
唐崎や空は晴ても雨此月
能えたり大雨晴て秋の月
明月を上荷や歸る失走船
勿体けなまや石山寺の月
名月や堅田おきすは月の掉
塲所かゑてまた新らき月見哉
惜とつ、月おきす戸の動きあ
硯もかたむ影や今日此月
むつみ合ふ雅ひの友や月の椽

月の雨寐もの語りとなりおけり
夜は秋を松に纏る月見りあ
松お月更して庵の納涼かな
名月や此静かさ何處か果
寐あはりて二度見る月の夜哉
松風のあらま夏の月夜かな
明け惜む心美し月の人
見古まの附るぬ詠や松の月
十六夜お松の懐探るきり
憶免る秋の景色や松の月
今雨乃晴をぬまや冬の月
浦波の打草臥れて春の月
此頃の海の静けり春の月
帆柱の中うら出たり春の月
夜干した綱の句ひや臘月
底ぬた空の詠や今日の月
三井傳鐘撞は出にけり湖此月
粟津うら晴て大津や月の雲
月見んと勢田のふな橋渡りけり
雪より花あま比良の月のり
比と本の松からききや月の雨
ききしに影を見せけり雲の月

唐崎の松や初日名月も
燈臺は却てきら月秋
鯨よりおすつほんかよ月宴
鳴物の手練盡しぬ月の宴

各位出詠ノ有無ニ不抱此地卷披見次第適宜
拔卷ヲ製シ十句以上撰出拔萃ナシ印刷費六
錢相添次回投稿ト共ニ本會エ御送附有之様
御依頼申上候

但シ拔句ニハ肩へ何番ノ内上段何行目或
ハ下段何行目ト御記シ被下度候事